

白山現地ルポ

登山者の健康を守る 雲の上の診療所

8月中旬のある日。私は標高2450メートルにある白山室堂センターを目指した。今日は登頂を目指すいつもの登山とは違う。白山で活動する「金沢大学白山診療班」を取材することが目的だ。登山開始から4時間、やっとの思いで室堂センターにたどり着いた。息を切らせながらロピーを見渡すと、右手奥の方に「診療所(Clinic)」の案内表示が目についた。

社会貢献室 山本秀樹

半世紀の歴史を刻む 山岳診療ボランティア

診療班は、白山登山者の健康と安全を守る山岳診療ボランティアだ。医学部出身の医師や現役医学生有志によって構成され、毎年7月中旬から8月末までの夏山シーズンに「白山診療所」を開設し、診療活動を行っている。

診療所の歴史は半世紀以上に



さかのぼる。昭和28年（1953年）7月8日に診療班の第1班が入山して以来、350人以上の医師・学生が診療ボランティアを続けてきた。

取材に訪れたこの日は、田谷正樹医師（平成15年卒、泌尿器科医）と5人の医学生が迎えてくれた。診療所には2台のベッドのほかに、薬棚、洗面台、ストーブ、酸素ボンベ、聴診器などが置いてあった。酸素ボンベとはいかにも山岳診療所らしい。標高2450メートルの診療所では、夏でもストーブが欠かせないのだという。窓越しに外を眺めると、眼前に白山の雄大な頂がそびえていた。

日の出前から始まる 診療所の1日

診療所の1日は、まだ日が昇らない暗がりの早朝から始まる。

午前4時に起床後、まずは応急手当セットを持って、山頂へパトロールに向かう。ご来光を拝むため、道を急ぐ登山者の事故に備えてのことだ。その間、診療所に残った班員は器具の消毒やバッテリーの充電、掃除などを行う。午前7時ごろからは室堂センターの厨房を手伝う。室堂スタッフと診療班員はいつも協力している。日中は診療活動と登山道のパト

ロール。患者がいない時は、薬品の管理や診療所の整理をし、時間があれば医師から指導を受ける。午後9時に消灯するが、患者が来た時は24時間体制で対応する。

取材日の午前中の患者数はゼロ。午後からは7人が訪れたが、いずれも軽症で済んだ。お盆の休日と重なって室堂センターの宿泊者は約700人もいたが、大きな事故もなくその日は過ぎた。

学生が経験を積む場 山ならではの楽しさも

医学生は診療所のどういう部分に魅力を感じているのだろうか。

1年生のときから毎年欠かさず入山して活動を続ける診療班サブリーダーの朝倉大貴さん（5年生）は、「医療現場を体験できるし、登山者との温かいふれあいが楽しい」と語る。

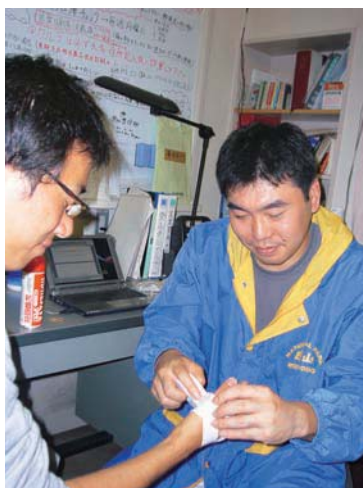
大学の授業では、患者と直接触れ合う機会は少ない。しかし、診療所では救護を手伝いながら間近で医師の処置を学べ、患者と接する機会を得られる。患者がいないときは直接教えを請うこともできる。朝倉さん以外の班員も、全員が「医療現場の体験が何より勉強になる」という。

魅力はまだある。山際歩き（6年生）は、「患者からのお礼の

室堂平から山頂を望む。ここ白山には年間約5万人の登山者が訪れる



取材日の班員。後列左から黒田かおりさん(2年)、林恭平さん(3年)、武原聡子さん(4年)、山際さん。前列は朝倉さん(左)と田谷医師



テーピングの指導にも熱が入る



万一の備えに医薬品の補充も欠かせない



ベッドは2床。窓からは山頂が見える



登山者でにぎわう室堂前

限られた設備と人材で最善の処置を施す

ちが経験を積めるように、医師として協力したい」。学生時代に得た経験を後輩に伝えたいという思いもまた、半世紀以上にわたる診療所の歴史を支えている。

魅力ある診療所の活動にも、時には苦勞が伴う。高山では同程度の病状や事故であっても、平地に比べ深刻な状態になりやすい。医療設備が市街地の病院とは比べものにならないうえに、設備の整った医療機関も近くにはない。一刻を争う状況でヘリコプターが出勤

することも年に数回はあるという。医師の不在で、医学生だけで診療所を守らなければならぬこともある。しかし、「診療」は医師にしかできない。医師の不在時には「休診」にしているが、そんなときでも患者が来たときは、医学生ができる限りの処置を施す。医学生が「一番の不安は、ドクターレス(医師不在)の夜なんです」と口を揃えるのも無理はない。医学生だけでは判断がつかない場合は、すぐにふもとの医師に連絡し、指示を受ける。班員は診療室に隣接した部屋で就寝し、深夜の急患にも備えている。

準備を整えることが診療班への協力に

ティアとして最善を尽くしている診療班の活動について、白山室堂センター所長の小澤外志男さんは、「診療班がいることで安心感があります。治療によって結果的に命が助かった人が何人もいます」と、その存在の大きさを話した。

皆さんはこの診療所の存在を知っていたらどうか。ほとんどの登山者は診療所の世話になることなく下山していく。そのため、診療所そのものや、そこがボランティアによって運営されていることは、

あまり知られていないのではないだろうか。大学医学部などが運営する山岳診療所は全国に23カ所あり、金沢大学には白山診療班の他に立山の雷鳥沢と剣沢の2カ所で活動をすすめる立山診療班があるという。

診療班の活動を知ったいま、その存在を「保険」にして安易な気持ちで登山するのではなく、これまで以上に準備を整えて臨みたい。そう思いを新たに、私は下山の途について。無理のない計画を立て、体調を整えて登山すること、健康な身体で下山することが、診療班や山に関わるスタッフへの何よりの協力が繋がるのだ。

登山者の疾病で特に多い「類高山病」Q&A

Q: 類高山病の症状は?

A: 頭痛、悪心、寒気、全身倦怠感などです。ひどいときは呼吸困難や肺水腫などになる場合もあります。

Q: 予防方法は?

A: 最善の方法は、まず、体調を整えることです。睡眠不足はよくありません。類高山病は体質にもよりますが、「無理をしない」「ゆっくり歩く」「水分をこまめ

にとる」など基本的な体調管理をすれば、ある程度予防することができます。また、高地は昼と夜の気温差や低地との気温差などで体調を崩しやすくなるので、上着や雨具の持参も大切です。

Q: 症状が出てしまったら?

A: 下山することをお勧めします。類高山病は気圧の関係で空気中の酸素が少なくなったときに起こります。下山すれば症状は改善されます。

